

男と女の不完全マニキュア

# 金星の男と女

薄井ゆいじ



株式会社 ウィアックス

金星の男と女

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11
金星	毒茸	写真	猫酒	料理	登山	寒風	鍵穴	手紙	階段

## 階段

階段を昇っていくと前から女が降りてきた。女はプードルを連れてくる。年は二十八歳くらいだろうか。あるいは五十二歳かもしれない。派手な化粧と奇抜な服装のために、年齢がまるでわからない。

その女がすれ違いざま僕に、

「ちよつと待って、あんた」と言った。

僕は立ち止まって女を振り返った。

「僕ですか」

「そう、あんた」

「何か？」

「あんたいま、私のスカートのなかを下から覗きこんだでしょう」

「そんなことしませんよ」

「私のスカートがいくら短いからって、覗きこむなんて失礼じゃない」

「ですから、そんなことしてないって。僕はただ、プードルを見ただけです。可愛い犬だなんて」

「嘘おっしゃい。どうしていつも、そういう嘘ばかりつくの、あんたって人は」

「僕は嘘なんかついてない。それに僕は、あなたとは初対面だ。いつも嘘をつくなんて言われる覚えはない」

「ふん」女は子犬を抱き上げると、その背中を乱暴に撫でた。「結局、そんな言葉でごまかされてしまうのよ、私は。どうしてあんたは、私のことが好きだって素直に言えないの」

「そんな……」

理不尽である。僕はこの女性と、もはや話をつづける気力を失った。女をそこに残してまた階段を昇りはじめようとする、女の声が追いかけてきた。

「ちよつと、あんた。謝りなさいよ。ほら、その青いTシャツ着てジーンパンをはいた尾上一郎、三十六歳」  
僕は足を止めた。なぜ女が僕の名前と年齢を知っているのか、不思議でならなかった。女を振り返った。

「いま、何と？」

「尾上一郎、三十六歳。リストラされて収入がなく、プードルを連れた美人のスカートを覗くことしかできない、うすのろトンカチ男」

「覗いてないって。いったいきみは誰なんだ」

「私に興味があるわけね」女は、にっこりと笑った。「それならそうと、早く言えばいいのに。お茶ぐらいなら、ご一緒して差し上げててもよろしいことよ、ほほほ」

十五分後、僕はなぜかその女と、喫茶店のテーブルに向かい合ってすわり、コーヒーを飲んでみた。誘ったのが女なのか僕のほうからなのか、そのときにはもう、判然としなくなっていた。

「ねえ、きみは僕の名前や年齢を、どうして知ってるんだ」

喫茶店の外の歩道に繋がれたプードルが、飼い主を求めて哀れに鳴いている。その様子をちらりと見て女が言った。

「あんた、本気でそんなことを言ってるわけ？ 別れた前の女房が、あんたの名前と年を知っていることが、

そんなに不思議なことなの？」

「前の女房？」

「あんたのいやらしいところは、そうやって事実から目をそらすことなの。リストラされて女房に愛想尽かされて、それでもスカートの中を覗こうという根性が、私には情けないのよ」

「覗いてないって。……きみが、前の女房？」

「同じこと、何度も言わせないで」

僕はまだ結婚もしていない。そして向かい側でコーヒーを飲んでいる化粧の厚い女の顔は見たこともない。

「こんな話、聞いたこともないよ」

「ふん」と女は鼻を鳴らした。「復縁を迫ろうという魂胆ね。あんたが考えてることなんて、手に取るようにわかるの。ベティちゃんだって、そのくらいのこと、ちゃんとわかってるから、あんたにべたべたしたりしないのよ」

「ベティちゃん？」

「あの子の名前も忘れたの？」

彼女は歩道にいるプードルのほうを指した。あの犬は、そんな名前だったのか、と思ったが記憶にはないし、あの犬を見るのはじめてだった。

「さあ、わかったらお散歩にでも行ってきた」

「散歩？」

「ベティちゃんに、散歩をさせてあげて。私はここでゆっくりとコーヒーを飲んで家に帰るから」

「なぜ、僕が」

薄井ゆうじ（うすいゆうじ）

1949年茨城県生まれ。イラストレーター、デザイン会社経営を経て、『残像少年』で第51回小説現代新人賞を受賞。『樹の上の草魚』で第15回吉川英治文学新人賞を受賞。主な著書は、『天使猫のいる部屋』『くじらの降る森』『12の星の物語』など。



チョット見文庫

男と女の不完全マニュアル

## 金星の男と女

発売日 2012年3月30日

著者 薄井ゆうじ

編集 栗田孝子

装丁 2010

企画 林秀和 西門直 大西健之 梶川悦子 志田淳

発行者 小川巧次

発行所 **株式会社 ヴィアックス**

〒164-8677

東京都中野区弥生町2-8-15

TEL 03-3299-6009

<http://www.viax.co.jp/>

無断転載・複製を禁じます。

© Yuji Usui 2012

この作品は2000年11月から2009年4月、月刊『アップルタウン』誌に連載したものに加筆修正したものです。